

シェルの南アフリカ

角 和 昌 浩 （かくわ まさひろ）

要約 ロイヤル・ダッチ／シェル（以降「シェル」と略す）が南アフリカでビジネスを始めたのは、1902年に遡る。第2次大戦後のアパルトヘイト体制下でも石油精製販売を継続した。時は移り1980年代、反アパルトヘイト運動が国際的に昂進した。ヨーロッパではキリスト教団体が運動の一翼を担い、シェルとの対話を試みた。ところが、この運動が欧米でシェルブランドに対するボイコット運動に発展して、世界中のシェルのビジネスに影響が及んだ。多国籍企業たるシェルは、従前より分権統治体制を敷いていた。各国現地会社は、他の国の現地会社の個別事情には関わらない、というポリシーだった。けれども、南アフリカ現地のシェル社固有の国内政治・社会問題に、他国の現地会社が巻き込まれたのだ。

1. 南アフリカ石油禁輸問題、前史

1.1 ローデシア

南アフリカ共和国に対する石油禁輸問題は、実は、1965年から80年まで存在した奇怪な白人国家ローデシアの物語に遡る。今、世界史の記憶から消えんとする話である。今回投稿はここから始めます。

まず歴史地理を紹介します。

ローデシア共和国は1965年当時、英国植民地だった北ローデシアとベチュアナランド、ポルトガル植民地のモザンビーク、そして南アフリカ共和国と国境を

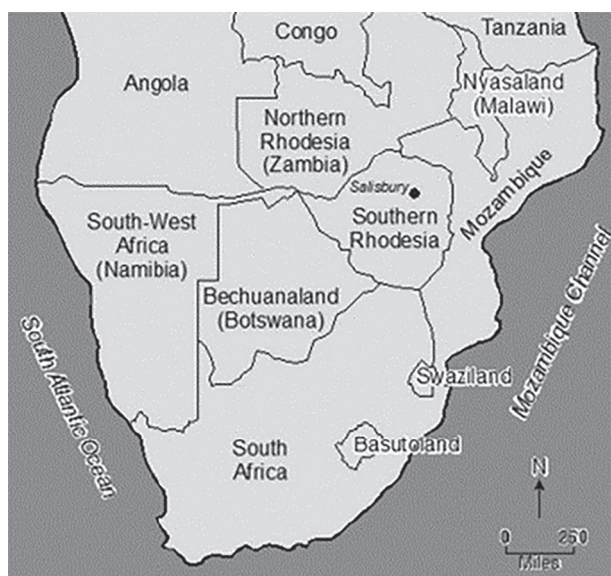
接していた内陸国である。

1965年11月11日、ローデシアの南半分 Southern Rhodesia が、英国植民地からの独立を宣言した。現地政府の首相イアン・スミス（Ian Smith）が、本国が派遣した総督 Governor を追放して、国名をローデシア共和国と定めた。

南ローデシアは英国出身の白人入植者が多数住む地域だった。19世紀、大英帝国ケープ植民地の首班セシル・ローズが、オランダ起源のボーア人の植民国家である、東北辺内陸を領域としたトランスヴァールとオレンジ自由国に対して、北方から圧力をかけ、ケープ植民地軍と挟撃せんがため、1889年、「英国南アフリカ会社 British South Africa Company」を設立した。この会社が、南部ローデシア地域で農業プランテーション経営を目指す英国人たちの入植を支援しつつ、実効支配領域を確保した。

さて英国本国はローデシア独立宣言を反乱行動とみなし、英連邦からの一方的な離脱は現状秩序侵害にあたる不法行為、とした。そこで国連安保理の議題に取り上げ、結果1965年11月20日をもって国連加盟国による対ローデシア制裁が発動されたのだった。

ところでこの制裁には石油禁輸が含まれていた。英国政府は、英国法人あるいは英国人が南ローデシアに対して、直接、あるいは第三者取引を介して石油を売り渡すことを禁じた。国連加盟国の大部分は、同様の規制を自国民／自国籍法人に課した。が、ここで2国がこの国連決議から離脱した。南アフリカ共和国とポルトガル植民地のモザンビークであった。南アはローデシアと北辺で国境を接し、モザンビークは東の隣国である。



出所：Ruth Craggs, Towards a political geography of hotels : Southern Rhodesia, 1958-1962